

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	場と言語
Author(s)	岡田, 紀子
Citation	児童の言語生態研究 , 2 : 2 - 6
Issue Date	1968-12-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045028
Right	
Relation	



場と言語

岡田紀子

哲学研究者が、しかも現象学Ⅱ実存主義を出発点にしている哲学研究者が「場」という課題で何を語る事ができるか、正直なところ少々困惑してしまつた。それでここでは時枝言語学の「場面」の概念を取りあげ、もともとこの理論が拠所になっている現象学的ないし実存主義的思想のうち、それを再び返し入れることによつて、場ということについて若干の理解を得たいと思う。だいたい哲学のいうことは「役に立たない」に決まっているのだから、あるいは期待されていたかもしれない「現場」への考慮はご勘弁願うことにするが、結局私たちにとって経験の根源性というものが最後のものだとするならば、そのために少しでも反省を深化しようとするのが願ひでもあり仕事でもある。

時枝誠記の「言語過程説」は、彼の名著『国語学原論』で体系的に論じられたので、以下ではそれに頼ることにする。言語過程説の基調は、言語を人間の行為と考え、私たちが「語つたり」「聞いたり」「書いたり」「読んだり」する言語の具体的な経験のうち、言語を取り戻そうとすることにあつた。というのは、言語が音声と意味の結合したものと、人間が伝達のために使用する道具とみなすような通俗な言語の道具観と戦うものであつた。

まず、言語の存在条件として彼が論じている「主体、場面、素材」について見ていくことにしよう。もちろんこれらは具体的な言語の経験において一体となつていて切り離しえないものである。

一、主体 主体とは言語における話し手のことで、言語的表現行為の行為者である。この場合話し手は文法上の主語とは全く違つている。「私は読んだ」の「私」が主体ではなく

その私はすでに客体化され素材化されたもので、それについて何かが語られるところのものである。主体とは「私は読んだ」といつている者のことであるから、言語の主体は決して素材とは同列には自己を表現しないということになる。というのは、時枝言語学における有名な日本語の語彙の詞と辞への区別と、文章を詞と辞の結合とする見解に基づいている。たとえば「ばらばら咲くよ」という文章において「ばら」「咲く」はそれぞれ詞と呼ばれていて、特定の概念を、また、したがつて特定の事物を理解させるものであり、その文は全体として客観的事態を示している。ところが「よ」は辞であり、そのような客観的世界を表わすのでなく、主体の直接的表現であつて、「ばらばら咲く」ということに對する主体の統括機能——この場合感嘆的な表現である。言語表現はそれゆゑに、客体的なものを主体的なもので包み表現する、文法的にいえば詞を辞で統括することによつて成り立つ。

二、場面 場面とは単に場所や空間のことではない。もちろん空間の規定を含むが、同時にその事物情景に志向する主体の態度、気分、感情を含むものである。したがつて、場面は純客観的世界でもなく純主体的志向的作用のこともなく、主客の融合した世界である。常に私たちはこのような場面において言語活動を行なつてゐる。言語における最も具体的場面は聞き手であるが、その聞き手に対する特定の主体的な態度、気分、感情（親しい気持ち、けむたい気持ちなど）において言語行為をすることになる。しかし場面は単に聞き手でなく聞き手を含む背景全体をいう。場面の存在ということとは、私たちが生きてゐることにほかならないといわれる。場面は言語の表現を制約する。厳肅な場面、くつろいだ場面ではことば遣いは必ずから違つてくる。特に場面がはっきりしているのは、日本語における敬語であろう。「暑いね」と「暑うございますね」という二つの表現は、いわれている事からは同じであると考えられるが、場面の相違によつて変容されたものである。表現が場面によつて制約されるといつたが、逆に制約する、つまりユーモアのあるひと言が緊張した雰囲気を持ち破るといふことも当然含まれてゐる。

また主体の時と同じように、第二人称が場面ではない。「汝は読む」の「汝」は聞き手としての場面ではな

く、すでに客体化され素材化されたものである。したがって、場面もまた素材と同列には言語に自己を表現しないので、聞き手としての場面とは、「汝は読む」と話しかけられる者のことである。

また先ほど主体、すなわち話し手といったが、言語の受容者としての聞き手は話し手と同様に言語の主体である。それゆえ、いままでの場面としての聞き手は、主体である話し手の志向の対象のことである。聞き手の言語経験を主題にするならば、今度は話し手が場面的意味をもった聞き手の志向の対象となる。この辺の分析は優れて現象学的といえるだろう。一般に言語の理論で、場面を重要視したということ自体、非常にたいせつなことであったが……。

三、素 材 素材とは言語によって理解される表象、概念、事物であり、普通は意味と呼ばれて、音声形式に対応させられ、言語の構成要素とされているものである。しかし、それらは、すべて主体によって「ついて」語られる素材であって、言語を構成する内部的要素とみなすことはできない。こうして事物、表象、概念をも言語から除いてしまった後で何が残るかという、素材に対する主体

的機能である概念作用または意味作用である。これが言語の本質的なものである。意味論の問題となるが、ここからすると、意味とは言語によって喚起される事物や表象のことではなくて、素材に対する言語主体のはあくの仕方を含むものである。意味とは意味づけのことになる。だから主体ということ強調することになる。

もちろん言語の存在条件は、言語そのものではないが、すでにそこに言語の本質が読みとれるだろう。今までの見解をまとめると、言語とは音声と意味の結合した「物」ではなく、話し手の方から見れば、具体的事物を概念的に把握し、聴覚映像と結びつけ、発音行為にうつし、ここに言語として表出する過程であり、聴き手のほうからすれば、音声を聴覚映像と結びつけ、概念を通じて具体的事物、事がらを理解する過程である。いうまでもなくそれは場面における行為である。それゆえ、すべてどの段階でも主体の行為に帰着させられるので、「言語過程説」と呼ばれるのである。そこに見られるのは確かに、「物」としての言語から、「事」としての言語観への転向であろう。以上はできるだけ簡単に要約した

言語過程説の言語理論であるが、たしかにそこには言語にとつての場面の不可欠性が述べられてはいるが、一般に場の問題にとつて何が獲得されたのだろうか。場面とは私たちが常に言語活動を行なう世界であるが、単に客観的空間の規定ではなく、その世界に志向する主体の態度、気分、感情を含むものとされていた。しかし単に「主客の融合した世界」というのは、おそらく言語学者にこれ以上説明を要求することはできないだろうが、もう少し吟味してみなければならぬようである。なぜなら客観的世界があらかじめあって、また主体があつて、その主体の働きによって場面が成立してくるとすると全く誤解だからである。

ところで実存哲学には特に場の理論と名のつたものがあるわけではなく、全体的にいつて場を重視する哲学であるといえるだろう。ここではハイデガーの「世界・内・存在」の概念が、時枝言語学の「場面」をより明らかにするだろう。ハイデガーの精密な世界・内・存在の分析を全面的に追つたりすることはできないが、世界のうちにあるということは何を意味するのだろうか。世界・内・存在は人間の存在のあり方であ

るといふことが何よりも肝要である。世界のうちにあるということはまず世界内で出会うさまざまな存在者を配慮するといふあり方である。いま、存在者といったが、それは道具というあり方の存在者である。最初に私たちが出会うのは、ただの「事物」ではなく、書く道具、縫う道具、工作する道具等である。しかも道具は一つだけでは存在しない。一つの道具は常に道具連関の全体のうちにある。道具は本質的に「何々するためのもの」という性格をもつが、それがもし道具なら、インク、ペン、紙、スタンド、つくえ等とそれから部屋の全体を指示するだろう。しかも個々の事物が現われて部屋を満たすのではなく、この部屋という全体からそれぞれの道具がその場所を得ている。道具の連関は、私たちの住む環境世界の全体において「出会われるので、人間が作ったものではない自然も、まずは私たちの製作の材料としての道具である。そしてこの配慮は、理論的な意味の認識ではなく、いとしても、全くの盲目ではなく、固有の認識のし方」であり、「知」に導かれる存在のあり方である。

しかも、道具の連関とともに他人という存在者にも出会われる。個々

の道具、また配慮される製品はそのような人々に役に立つためのものがある。道具は使用者を指示する。しかも道路や橋や建物という形で、環境世界は公共的な共同存在のために配備されている。したがって、まずただの事物があつて、それに使用価値などが加わるわけではない。まず、私たちにとつて配慮というあり方が最初のものであり、事物の理論的な認識は、道具性を引き去つた後に成立するものである。それゆゑ認識を純粹知覚から始めるのは抽象である。時枝誠記が「主客の融合した世界」のもとに何を理解しているとしても、物在とその知覚のことでなく、配慮の世界・内・存在の意義を確認しておくことが言語の問題にとつて重要である。

また当然世界・内・存在は文字から知られるように、独自の空間性をもっている。道具というものは非常に身近にあるので、通常の状態では、その存在が目につかないほどである。もし道具が壊れたり、必要なの見えたらなかつたりして初めて私たちはその道具性に気づくのである。さて、道具は本質的にその特定の場所をもっている。つまり道具の連関のうちにはふさわしい場所をもつ

のだが、一定の空間にとつては、そこに備えつけられたり納められたりしているという意味である。しかし、存在者が場所を持つというのはほんとうは不正確なので、人間存在自身が世界・内・存在として「距離を取る」（これは距離を取り去つて近づけるという意味も、また遠ざけるといふことも含む）存在者であるといふことに基づく。それによつて世界のうちに存在するものは独自の近さを遠ざけてもっている。その距離は、何メートル、何キロメートルという距離ではない。眼鏡をかけている人にとつては、顔に密着する近さにある眼鏡は、彼が見ている壁の絵よりも、存在論的にはずっと遠いものである。遠方から来る友人を駅に迎えに行く私には、私の利用する道路や乗物よりも友人のほうが存在論的に近いである。このように距離を取る者として、人間存在自身が空間的なのである。そしてこのような存在者として、道具の全体を適切に配置し、また環境世界を配備するのである。空間は、まず第一には三次元の多様性といつたものではない。

世界・内・存在が独自の空間性をもつものであることを、言語学者、佐久間鼎氏は認識していた。彼は日

本語のいわゆる指示代名詞における有名な「コソアド」の体系を説明した。日本語の指示代名詞は、「こ」（近称）、「そ」（中称）、「あ」（遠称）、「ど」（不定称）の整然とした体系をなして（不定称）の整然とした体系をなして、発音や語形が多少変わったといつても、古代から現代まで原則的に変化していない。「これ」または「それ」とは何を意味するのだろうか。「これ」は決してどこでもかまわないところから客観的に規定されるものでなく、時枝の用語を用いれば、主体からそれがいわれるのである。「それ」も「あれ」も同じように主体からの距離の近さ、遠さによつて把握されている。もちろんそれは主体があらかじめ配慮的な世界・内・存在のあり方をもつからであつて、世界のない主観にとつてこのことは不可能であらう。

さらに場面の規定である世界に対するまたは聞き手に対する「主体の態度、気分、感情を含む」といわれていることの哲学的説明が必要である。先ほど世界・内・存在は最初からは認識といふことはいえないとしても、「知」に導かれているといわれていた。つまり世界・内・存在とは単に人間の存在、または人間の行為をいい表わすというばかりでなく、

存在の意識でもあるといふことが本質的である。人間の存在が世界・内・存在であるといふことは、世界のうちに存在するものや他人の存在があらわになつていふこと、さらにそのようなものにかかわる自己の存在が了解されていることを意味するので、それはハイデガーによつては開示性と呼ばれている。そして開示性の最も直接的あり方が気分であるから、世界の発見はまず単なる気分委ねなければならないとハイデガーはいふのである。したがつて「主体の態度、気分、感情」は人間の存在のあり方というので、もともとが孤立した主体が世界に向う主体的行為と考えられてはならない。確かに時枝言語学の主体にはいくらかそのようなデカルト的な無世界的主体の傾向がみえなくもないが、私たちはしっかりと世界・内・存在のうちにその「主体」を取り戻さなければならぬ。なぜならそれは全く言語にふさわしくないし、「コソアド」の体系の前でもただちに難破してしまうだろうからである。

ここで再び共同存在の問題に帰らなければならない。時枝言語学において、主な場面は聞き手であり、敬語などが取りあげられるのだから、

人間的場面が意味されているという
ことはまちがいないであろう。共同
存在の問題は、世界のうちに事物と
ともに他人たちもまた出会われると
いうだけではない。もともと世界は
すでに他人と共にわかちあっている
世界、共同世界である。少なくとも
私たちにとっては、存在するという
ことは共同存在するということであ
る。しかもその共同世界は具体的に
は歴史的世界にほかならない。私た
ちは歴史的世界のうちで、そのつど
の状況から可能性を汲みだして投企
していく、そしてこのことが歴史の
根源であるゆえに、人間の存在自体
が歴史的であるといえる。そして言
語こそそのような歴史的共同存在を
成立させているものである。道具を
通じての配慮的あり方も、ほんとう
はすでに言語なしではなかった。「事
物情景に志向する主体の態度、気分、
感情」が言語の場面であるというと
きには、歴史的世界がそれらの全体
を包む場面としてあるといわなくて
はならないだろう。

言語が歴史的共同存在を担うもの
であり、また言語自体が歴史をもつ
ものであることはその事体としては
何も新しい発見ではない。時枝誠記
が、文字を簡単にし、文字を音声に

近づければいいというような安易な
国語改革を批判する時、言語の歴史
性に十分留意していたといえるだろ
う。もともと言語過程説の最大の長
所は、言語の歴史性を十分評価しう
るということにあったのである。言
語のあり方もまた、ハイデガーが人
間存在についていつた歴史的世界に
おける「被投的投企」である。

こうして私たちは場面ということ
から、ついに歴史的世界・内・存在
に達したことになる。これで言語に
おける、あるいは一般に、本来の場
の概念に達したのだろうか。いうま
でもなく、歴史的世界・内・存在と
は、歴史的次元を考察に入れた上で
の存在するもの、共同存在、また自
己の存在に開かれてあるということ
である。いったいそれは言語とはど
のようなかわりがあるのか。だが
この問は私たちを今までと全く違っ
た次元へ移すのに気づく。もう一度
問をいい替えれば、おおよそ存在の
開示性ということが、あるいは了解
といえるかぎりには、すでに言語が
あるのか？ ということである。そ
れは肯定されなければならない。ハ
イデガーにおいて気分や了解という
開示性と同時に、言語は世界・内・
存在を構成するものとされている。

それだから、実は場の理論というこ
とで言語を持ちだしたのは、任意で
も唐突でもなかったのだ。今や言語
は場面をもつというのではなく、む
しろこういわなければならぬ。言
語は場なのである。

しかし最後の命題はどのような意
味なのだろうか。少なくとも人間的
精神にとっては、世界と他人を了解
するのは、言語においてでしかあり
えない。言語は、歴史的世界はい
までもなく、おおよそ存在するもの
が開示されてあるといわれるところ
まで届くのであり、人間にとって存
在するものが近づかれる「場」であ
る。無限の精神ならいざ知らず、人
間存在にとっては、世界・内・存在
の言語性が最後のものである。言語
の世界経験の外に身を置くことは不
可能である。言語なしに認識された
ものに言語的表現を与えて認識が完
成するといふようなことが存在する
のではなく、言語とは了解されうる
ものが分節されて語にまでも連れて
こられること自体である。言語の普
遍性というのは、最終的にはそこか
ら切りひらかれるすべての認識、す
べての学問の体系までもを包括する
からである。すると通常の人間は言
語をもつといういい方は正しくな

い。言語は決して人間が自由に操作
しうる記号でも道具でもない。もち
ろんそのような記号や道具にと水平
化されうるのだが。

最後にこの場面の理論から再び時
枝言語学をふり返ってみると照明さ
れてくる問題点がある。その「主体」
の規定の不十分さはすでに検討され
たはずであるから、これ以上触れな
い。もう一つの問題点は、時枝理論
においては、事物、表象、概念が等
しく言語の素材とされていることだ
である。それらは言語行為なるもの
「対象」というふうに理解してはなら
ない。言語が世界経験そのものでは
あるといふことがすでに明らかにされ
た以上、ガダマーが指摘したように、
言語が世界に対して独立の存在をも
たないといふことはつきり念頭に
おいておかなければならない。事態
の解明性があつて、つまりそれが言
語なのだ。さもないと、彼自身がき
らつていた言語の記号主義に知らず
知らずにおちいってしまう危険があ
る。私たちが言語を話すとき、また
は聞くとき、事がらそのものの前に
連れ出されているのでなければなら
ない。こういふのは素朴な事物と言
語の混同などではない。また事物と
表象・概念の間は区別しなければな

らない。表象と概念が表象作用と概念作用として言語過程のうちにとり込まれているということは全く正しいのだが、そのかぎりで事物とは區別されていることにならう。もしある表象を言語にもたらそうとするなら、その表象は事態としての資格において言語にもたらされているのである。したがって、彼の意味の定義「素材に対する言語主体の把握の仕方」ということも、主観主義的に理解してはならないだろう。意識の志向性が主観性に縛られているとしても、言語の存在はそのような主観性を越えさせるものである。

(都立大学文学部助手)

参考文献

- 時枝誠記 「国語学原論」
- 佐久間鼎 「国語学原論統篇」
- Heidegger; Sein und Zeit 9. Aufl.
- Hans-Georg Gadamer; Wahrheit und Methode. 2. Aufl. 1965 (Mohr)

次号予告

特集 国語の力(言語能力)はどうテストすればよいか

○国語の力(言語能力)とは何か

○国語教育界におけるその定義一覽

○現場における言語能力の調査とそのテスト化について

○第二号評議会記事

○語学力・国語力 玉川大学講師 諏訪 功

◆くもりぼっこ◆

動物園を見学しての作文、二年生の男子

「フンボルトペンギンは くもりぼっこをしていました。」
と書いたので

「くもりぼっこってなあに？」

「ひなたぼっこをくもりの日にすることだよ。」

◆子どもの日記から◆(二年男子)

「そとは、朝からたいふう。」

そこを見ると、木がいまでもおちそうに、ゆれている。」

教科書の中に「ぬかる」という語が出てきた。

「ぬかるってどんなこと？」

「ぐにやぐにや。」

「べたべた」

「どろどろ」

「べたべた」

「びちゃびちゃ」

「ねばねば」

「ぬるぬる」

「ぐちよぐちよ」

これを全部いってみると、いかにも「ぬかる」ということが、わかるのではないか。

二年生の授業で。

(右三例||東京・桐朋学園
小学部・推名伸子氏報告)

◆木きん校舎◆

ある日、転校した児童(四年)から、

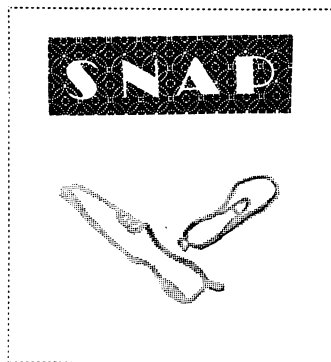
ていねいな手紙が来た。「ぼくたちの学校は、木きん校舎で古いです。」と読んでいた教師、何の抵抗もなく読み過ごし、しばらくして苦笑した。鉄琴から、木琴をそして鉄筋から……か。鉄筋からか、木琴からか、……

(府中市立第二小学校飯島千鶴子氏報告)

◆ごっこ遊び◆

幼稚園でのごっこ遊び。五歳児。

「こんどは何屋さんごっこしようかな」



と、一息入れた子どもことばに、つい誘われて、私がこう言った。

「幼稚園ごっこしようか」

子どもは間髪を入れず、

「できないよ。ここ、幼稚園だもの」

まわりの子どもたちまでが声をそろえて、私の愚かさを笑った。

(横浜・グリーンヒル幼稚園・田村京子氏報告)

◆気・毛◆

いたずらざかりの四歳の我が子。も

う近ごろはしかり慣れ、しかられ慣れているせいである。

母「ママは気が短いから、いつまでも泣いていると押入れに入れるわよ」
長男「ママは毛が短いことなんかないよ。毛が長いよ」

さっきまで泣いていたのである。聞きがちがいよりも突如反論に及ぶところ、子どものことばに対する注意の深さを思い知らされた。

(愛知県愛知郡長久手村 岩作宮後・岩佐誠氏報告)

◆いろいろな石◆

小学校一年理科の時間。みんなに石ころを集めて来させて、川の石、山の石、と教科書にある区別をさせていたしばらくたって、クラスで最も成績のよい優秀児が、石を持ってやって来た。

「先生、この石なんだかわからないんだけど……」

この質問を聞いたとたんに、私のほうがわからなくなった。花崗岩、水成岩、安山岩……私は矢継早に、石の種類を思い浮かべた。……私の知識は乏しい。どうしよう、……いや、正直に越したことはない。

「明日までに調べておいてあげる。ね」

その子は黙って背を向けた。よかった。ところが一瞬、電撃のごとく私の頭は、ぐわんとう鳴った。何たる悲運か？ その子は、その石が川の石が山の石かの区別をたずねに来ていただけだったとしたら……万事休す。

(埼玉県浦和市太田窪二六一四・宮田知子氏報告)